

GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

国際文化研究科 広報
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

No. 28

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

October 2015



CONTENTS

- 02 研究科長メッセージ
- 03 講座紹介
国際日本研究講座
多文化共生論講座
言語科学研究講座
- 06 前期課程・後期課程修了者からのメッセージ
武 暁桐
崔ハンハン
目黒志帆美
斎藤 珠代
バリー・カヴァナ
- 08 修了者によるアンケート
- 10 新任教員紹介
クラウタウ オリオン 准教授
勝間田 弘 准教授
- 11 研究紹介
寺本 成彦 教授
青木 俊明 准教授
- 13 最近の著作から
藤田 恭子 教授
江藤 裕之 教授
- 14 外交講座
- 14 平成27年度科学研究費補助金採択一覧
- 15 INFORMATION
オープンキャンパス2015報告
伊達聖伸氏講演会
講演会報告
国際文化基礎講座(公開講座2014)
国際文化学会活動紹介2015
- 16 研究科入試情報



TOHOKU
UNIVERSITY

研究科長メッセージ 国際文化研究科のビジョン



平成27(2015)年度より、東北大学大学院国際文化研究科は、文部科学省の認可を得て、従来の国際地域文化論専攻、国際文化交流論専攻、国際言語文化論専攻という3専攻を、国際文化研究専攻という1専攻に組み直し、16あった講座を8講座へと改編した体制の下で、新たな一歩を踏み出しております。

本研究科広報誌「GLOBE」の今号は、この節目に際して新しい講座の紹介を特集する企画を組んでいます。そこで、個々の講座の魅力や特

長が順次されるのに先立って、まず国際文化研究専攻と、新たに設けました3つの系について、この劈頭の研究科長からのメッセージの中でそれらの理念や特色をご説明し、併せてこうした新しい装いで本研究科が「東北大学グローバルビジョン」(平成26年5月発表)に連動して向こう3年ほどでどのような方向に重点を置いたビジョンを描いているかをお示ししたいと思います。

3つの専攻を1つの専攻へと統合した背景には、国際文化研究という、いわば旧来の学問分野を超えて学際的かつ総合的にアプローチし、分野横断的な視点から新たな知見や学説を創造してゆく、という本研究科の学問的営為の原点に立ち返りつつ、他方でグローバル化の時代に的確に回答してゆく志向があると言えます。つまり、専攻という壁を取り払うことでカリキュラムの編成や研究プロジェクト促進の面でより学際性を強め、また同時にグローバル化が進行する現代社会の要請によりフィットした講座構成へと組み替えを行いました。その際に、人材育成の目標をより鮮明にしました。すなわち、「グローバルに思考し行動する」高度な専門能力を身につけたプロフェッショナル及び研究者を養成することを目標に掲げ、そのために前期2年の課程に「グローバル展開基盤科目」群を新設し、深い異文化理解力、グローバルな諸問題の解決力、高度なコミュニケーション能力の涵養などを図ることにいたしました。

そうしたカリキュラムでの新しい試みに応じて、講座の枠組みを超えた系という括りで、グローバルに活躍できる基盤能力の修得を図るべく系統性のあるカリキュラムを編成しており、ここでの適切な履修指導を介して学生はコースワークに取り組みます。他方で、問口を広くした講座では、講座教員参加の下で学生が研究発表を行い参加者の闊達な論議により課題意識を深める総合演習・特別演習、また学年進行に照応して適時開催される各種発表会を中心とした学位授与促進プログラムなどを通して、重層的なレベルでの研究(学位論文)指導が行われ、基盤能力の上に立った研究スキルと専門能力を培っていくこととなります。

それでは3つの系の特色を簡潔に述べておきましょう。まず地域文化研究系は、日本も含めた世界各地の文化と社会の固有性、及び比較研究の手法を駆使することで地域間の接触・交流・影響

関係などの側面を探究し、ボーダレス化してゆく地域文化のダイナミズムを包括的に解明することを指向しています。グローバル共生社会系は、国家や国境を超えた地球規模で解決を迫られる諸問題、とくに異文化間の共生と、人間社会と環境との共生を視野に入れたグローバル・イシューの解決・改善に向けて、複数の学問分野の協働により新しい学問フロンティアの開拓を目指しています。そして言語総合科学系は、グローバル化・ボーダレス化の流れに向かう国際社会の中で、真に役立つ先端的な言語科学の知識と運用能力を具備し、国際的水準で先端的な研究を推進する能力を備えた人材、及びその応用として高等教育での語学教育を実践し推進する能力を備えた人材を育成することを目的としています。こうして本研究科は、3つの系それぞれでの教育と、1専攻下での系の密な連携により、幅広い国際的な素養と高い専門性を兼備した有為な人材を育むことを目標にしています。

次に、向こう3年間ぐらいのスパンで本研究科が重点を置いて取り組んでゆく方向性が何か、ここでは主に研究面に絞って述べてみたいと思います。第一に、高度教養教育・学生支援機構と連携できる教育領域に焦点を当てた研究開発に力を注ぎます。とりわけ高度教養教育開発推進事業に関連して、高校・大学接続の多文化社会理解のための科目の開発、「話す能力」を重視した第2言語教育カリキュラム拡充の研究、eラーニングシステムを活用した高年次学生に対する英語教育の応用開発などを主要プロジェクトとして推進したいと考えています。

第二に、国際的な視野に立った総合的な日本研究拠点の形成を目的に、スーパーグローバル大学創成事業の一環として、日本学をめぐって、世界の有力大学と協働した国際共同大学院の設置を、他の文系諸部局とも提携しながら実現するべく着実に準備を進めていきたいと思っています。紋切り型他者イメージとしての海外での日本研究と、自己陶酔的な日本での日本研究の両極端を排し、より国際的に相互発展性を秘めた日本学構築を目指します。そのための研究深化を国際日本研究講座はもとより、大学全体の重点的なプロジェクトとしても展開できるように研究計画の立案を心がけます。

第三に、本研究科附属の言語脳認知総合科学研究センターでの研究実績を基に、言語科学研究分野でのワールドクラスへの挑戦を行ってゆきたいと考えています。同センターが主催した本年7月の国際シンポジウムに続いて、種々の国際学術交流事業や講演会・セミナーなどの開催を進めたいと思います。

第四に、グローバルな諸問題に政治学・経済学・社会学・環境科学・工学などの複合的な角度からアプローチするグローバル共生社会研究の分野では、東日本大震災からの復興を牽引する各種事業を推進するとともに、国際的な共同研究の下、多文化共生プロジェクト、廃棄物リサイクル処理、資源の有効活用など地域社会や産業界とも連携した取り組みを前進させたいと切望しています。

以上のような重点的な研究の他にも、本研究科にはクリエイティブな研究の芽を育める素地や環境が整っています。国内外の意欲的な学生諸君の積極的なチャレンジを心より期待します。

講座紹介

国際日本研究講座

院生研究室での会話からみる国際日本研究講座

- M君「服部宇之吉という人が、僕が読んだ本によく出てくるけど、有名な人ですか？」
- D君「そう、日本の中国研究の第一人者だよ。彼以後の研究者たちは、みんな彼の影響を受けたみたいだね」
- M君「なるほど、そういうことだったんですね。先輩はよく知っていますね」
- D君「ぼくは、日本人の中国人観について研究しているからね」
- M君「ぼくは日本人の作家が、中国、特に上海を、どう描いていたかを研究したいのです」
- D君「たとえば、どんな人を取り上げる予定なの？」
- M君「今考えているのは、村松梢風や伊東憲です」
- D君「エッ、今の日本人が、ほとんど知らないような日本人作家をよく知っているね」
- M君「上海には、内山書店という日中両国のインテリが出入りする書店があって、そこでの人脈を調べていたときに、知ったのです」
- D君「上海の内山書店はぼくも知っているよ。芥川龍之介や谷崎潤一郎なども大正期に上海を訪れているからね」
- M君「ぼくは、とくに田漢や郭沫若といった中国の文人が、谷崎潤一郎との間で交わした手紙のやり取りについても、調べましたよ」
- D君「きみはよく調べているね。きみの場合、中国人のインテリが書いた文献が読めるからいいよね」
- M君「大学の図書館には色々な文献が揃っているので、文献の収集が今はしやすいです」
- D君「なるほど。ぼくたちは、お互い研究分野に共通点が多いので、情報を共有していけるといいね」
- M君「はい、そうですね。先輩は博士論文で他にどんな人を取り上げるつもりですか？」
- D君「まだ考慮中だけれど、佐藤春夫や金子光晴も中国を訪れているので、取り上げてみたいと思っているよ。ところで、時代が下るけど、三好達治も上海に行っているから調べてみたらどうかな」
- M君「アドバイスありがとうございます。ぼくも、他の作家について、調べていきたいと思います」

ある日の午後には中国人留学生の博士課程前期のM君と後期の日本人D君が、それぞれの研究について情報交換をしていました。研究熱心な二人はお互いの研究内容に興味を持っており、研究の立場はそれぞれ異なりますが、同じ視点でそれぞれの研

究分野に刺激を与えています。このような会話から、思わぬ研究の手がかりを見つけ出せるのが、国際日本研究講座の特色と言えるでしょう。

異文化交流

国際日本研究講座では、日本文化や社会というキーワードを基準として、学際的な研究をおこないます。現在、講座に所属する教員の専門分野として文学、比較文化論、思想史学、考古学等の多様な分野について研究することができます。

日本人の院生はもとより中国をはじめロシア、アルメニア、モンゴル、韓国からの留学生が在籍し、日中映画の比較や日本文学に見られる外国映画の影響や中国で放送される日本のドラマなど映画やドラマの研究を行っています。また日中の昔話の比較や、教育制度が与えた相互の影響を研究するなど研究テーマは多岐にわたっています。

授業では専門分野が異なる人からの意見や幅広い視野からの指摘を受けることができ、専門分野が異なる人からの指摘にこそ聞かすべき意見が多いと言えます。これまで触れたことのない手法やアプローチを学ぶ絶好の機会となり新しい視点からの指摘から発見することは多く、多角的に日本ならびに日本人について考察することが可能です。

留学生にとっては、自国での研究からだけでは得られなかった情報や、的確なアドバイスが教員や他の院生から受けることができます。一方、日本人の院生にとっても、情報の共有がはかれることから、視野の狭窄に陥らず相互に刺激を与え合い、講座内における院生同士の議論は闊達に行われています。



多文化共生論講座

文化と文化が接触すると、溶け合って一つになることもあれば、一方が他方を飲み込むこともあります。しかし、よく見ると元のそれぞれの文化は大きさや形を変えながらも消えることなく引き継がれていきます。あるいは一度消えたかに見えた文化が再び姿を現すこともあります。世界中でさまざまな言語、風習、生活様式、祝祭、芸術が伝承、継承、衰退、復活をくりかえしています。モザイク模様のようにひとつひとつ個性をもった文化は俯瞰すると大きな世界を形作っています。ジグソーパズルのピースのような、個々の文化を一つずつ調べ、その上で全体に当てはめて大きな絵を眺めること。私たちの多文化共生論講座が行っている研究活動を、こうたとえることができるかもしれません。

この講座はヨーロッパ文化論、比較文化論、国際環境システム論、多元文化論が融合する形で2015年に新しく誕生しました。読んで字の如し、世界のさまざまな地域の文化の状況や変化をいろいろな視点から捉えることを目指しています。そこに共通するのは「共生」というキーワードです。それは、一つの文化をそれだけで成り立つものとは見ないで、時間や空間をともにして存在するほかの文化とどのように並び立っているのかという観点から理解しようとする姿勢のことです。見方を変えれば、しばしば耳にするグローバル化はどのようにある特定の文化形態に表れ、どのような変化と意味をもたらしているのかを考えることです。

日本、中国、韓国、カナダなど多様な出身地の二十数名の学生・研究生のテーマは多岐にわたります。一部を紹介すると、歴史の分野では、英国の使節団が見た18-19世紀の中国のイメージを外交文書から掘り起こしたり、1920年代のチェコの女性ジャーナリストが提唱した「モダン」なファッションや生活を振り返ったり、19世紀イギリスのジブシーがどのようなイメージで文学や法律で扱われたのかを探ったり、かつて国外に移民してからドイツに帰還した人々が現在おかれている立場と自己意識を新聞から読み解くことに取り組んでいます。また人類学の領域では、南米のユカタン・マヤの焼き畑文化では人は



精霊をどう捉えているのかを人間の主観性の点から考えている学生もいます。あるいは、社会学の分野では、樹木葬や海洋葬など現代の新しい葬儀の形態の日本と中国での比較や、仙台の中国系住民と地元民との交流の場である友好団体の役割の調査を行っています。文学、芸術の領域では、フランスのヌーベル・バーグ映画監督クロード・シャブロールがアルフレッド・ヒッチコックの映画作法をどう取り入れているかを跡づけたり、日本と中国で放映されているアニメーションを比較してそこから両国の文化や国民性の違いを見いだそうとしたり、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』における終わりのない構造を、生と死という対立する存在の循環とそれがもたらす全体性から解き明かそうとしたりしています。また、哲学の立場から、人間の思考活動について、情報の入力と出力という因果関係を主張する機能主義と、感覚的体験にもとづく概念が支配すると考える立場のどちらが有効なのかを探る学生もいます。

このように実に多士済々な学生が集う毎週の総合演習の時間は、ドイツ言語文化、英文学、インド思想・文化史、マイノリティ、現象学、中欧地域研究、象徴主義などを専門とする（ほんの一部の紹介ですが）教員や学生のコメントが飛び交い、新鮮な知的スリルに満ちながらも、年数回のパーティと同じく和気藹々とした雰囲気が進められて行きます。



言語科学研究講座

本講座は平成27年4月の組織改編により、旧組織時代に3講座に分散していた8教員が集まって誕生しました。8教員の主な研究領域は、意味論・語彙論・生成統語論・語用論・認知言語学・日本語学・日本語教育・史的英語研究・言語コミュニケーションなど極めて多様性に富んでおり、したがって多様な研究テーマの学生諸君を迎えて充実した教育・研究を進めています。(教員の氏名・研究テーマは本研究科ホームページをご覧ください。)

現在、研究室には、旧組織3講座の学生も含め総勢28の院生が熱心に研究を続けています。そのうち6名は日本人学生、22名は留学生です(出身は中国・タイ・ブラジルなど)。学生の研



ゼミのあとと整列して、はい、パチリ!!

究のキーワードをご覧くださいと研究の多様性がご理解いただけると思います。

【キーワードの一部】：文法化、モダリティ、ヴォイス、アスペクト、統語構造、主語省略、サレテイル構文、二重目的語構文、中国語V得構文、中国語結果構文、自動詞・他動詞、事象複合、心理動詞、結果複合動詞、連体修飾節、副詞の連体修飾、名詞の項選択、格助詞、対照言語学、日中対照、言語類型論、文化的語彙、認知歴史言語学、中国の日本語学習・教育、あいさつ表現、ポライトネス、カタカナ語使用、など

修了生の就職実績として、本講座の前身である旧組織3講座の修了生の例をあげますと、日本や海外の大学教員、中高教員、公務員、民間企業など、多様な業種に優秀な人材を多数輩出しています。

以上、本講座の教員・学生・修了生について簡単にご紹介しました。私どもの教育研究に関心をお持ちくださり、私どもと一緒に研究してみようという意欲あふれる多くの若き挑戦者が、多数、本講座への入学をご検討くださることを期待しています。



とある日のゼミの一コマ

学生からのメッセージ①



後期3年の課程1年
エルネイ・リベイロ

私はブラジル南部の大都市、ポルト・アレグレから日本に留学に来ました。高校の時から、日本語をはじめとする世界の様々な言語に興味を抱き、ブラジルの大学では日本語学科を卒業しました。それから留学生として東北大学国際文化研究科に入学し、言語学研究で修士課程を修了して現在は博士課程に在籍しています。私の研究テーマは、日本語やポルトガル語、その他の言語において、省略された主語がどのように解釈されるのかという問題です。この研究テーマは人間の中心的な特徴である言語能力の解明に加え、語学教育においても重要な役割を果たすことが期待されます。将来は言語学の知識を活用しながら日本とブラジルの架け橋になることを目指しています。言語科学研究講座の研究室には研究と学生生活の必需品が完備しており、先生方と院生たちはよく助け合い、研究を中心とする学生活動に熱心に取り組んでいます。

学生からのメッセージ②



前期2年の課程1年
曾曾

言語科学研究講座の前期課程に在籍している曾曾と申します。中国の北京から参りました。現在は日中両言語における連体修飾構造(例えば日本語の「魚を焼くにおい」など)について研究しています。講座の先生方が日本語の言葉遣いや言語学の基礎から専門的な問題まで丁寧に指導してくださるおかげで、不便なく楽しい留学生活を送っています。また、充実したカリキュラムを備えていることが国際文化研究科の特徴の一つです。私たちが在學生は国籍を問わず、自分の専門分野を超え、言語文化・文学・地域文化・国際環境・政治経済など様々な分野の中から講義を選んで履修することができます。各自の取り組んでいる課題について多くの国の留学生とヒントを与え合い、研究の醍醐味を味わいながら、国際感覚を養っていきます。グローバル化が進んだ現代社会に求められる人材を目指している方は、ぜひ国際文化研究科にチャレンジしてください!

前期課程・後期課程修了者からのメッセージ



アジア文化論講座
平成27年3月
博士課程前期2年の課程修了

武 暁桐

留学生活に ついて語るときに 私の語ること

「仙台に着いた！」平成25年2月、京都から出発した夜行バスから降り、やっと13時間の旅が終わりました。初めて来た街に特有の新鮮な空気に囲まれ、思わず足を運びましたが、あまりの寒さに仰天、まさかこの街に2年も住むなんて！このように、私と仙台との関係はマイナスからスタートしました。

今月どれくらいお金が残っているかを気にしながら生活している貧乏留学生にとって、留学生活は梅雨時期の夜のランニングのようなものです、力を尽くしても、どうも気分がすっきりしません。が、仙台とその周辺の緑はいつも私の救いになりました（特に修論の時）。

修論は大変な長期戦でした。研究テーマは1920年代中国の日刊紙なので、12年分の新聞紙を1頁1頁丁寧にめぐり、その中の気持ちを察し、新聞紙と対話しなければならないのです。もちろん、新聞紙との対話がうまくいかず、お互いに無言のままの時もたまにあります。私はこれを「ニュースペーパー・ブルー」と名づけ、恋の倦怠期が訪

れた時のように、新聞紙から少し距離を取るようにしました。ニッカウヰスキー工場、桑の沼……仙台は夏から秋へ、秋から冬へとその杜の都の姿を惜しみなく見せてくれました。

論文の最後の段階では、経済が厳しいから進学は諦めた方がいいかもとずっと悩んでいましたが、国の両親から「私たちまだ頑張れるから、お金のことでやりたいことを諦めたら、私たちも悔しいよ」と長電話の後、仙台の12月の綺麗な光のページメントの中を一人でぶらぶらして「辛い時期でも続けたいことはほんとのやりたいことなんだ」と涙しながら自分に都合のいい解釈をして、進学することに決めました。

論文を書くことは決して簡単なことではありませんが、半年かけて朝バイト終わりの10時から夜11時まで何かに没頭することは、これからの人生の中でたぶん二度と体験できない経験ではないかと思えますと、この半年の苦労もなんだか懐かしくなりました。修士論文の作成につき、指導教員と講座の先生方の温かくかつ厳しいご指摘はもちろん、両親、バイト先の友たち、いろんな大切な人々の支えがなければ、この2年間で、今のような立体感のある私はいないでしょう。出会いは大事です。このように、後期課程に進学して、しばらくの間国際文化研究科にいますが、いつかいい顔で「さよなら」と言えるように、「これからまだまだ頑張らない」と思う仙台に来て3年目の私でした。



言語コミュニケーション論講座
平成27年3月
博士課程前期2年の課程修了

崔 ハンハン

研究への第一歩

ちょうど1ヶ月前のことだった。夜11時ごろ、宿題を終わらせ、研究室から飛び出して自転車置場に向かう途中、サークル棟の前でギターを弾きながら歌っている男子生徒の姿を見かけた。「愛の唄」だった。そして、なぜかふと思った。今こそが人生で一番幸せな時期かもしれないと。涼しい仙台の春の夜に、青春の唄が聞こえる。研究室に居場所がある。好きな研究ができる。そばに皆がいる。自分の時間がたっぷりある。今日も明日も夢を追える。そう考えると、本当に自分は幸運な人間だと思う。

今年の4月に、博士前期課程を無事修了し、後期課程に進学した。今振り返ってみると、楽しいことばかりとは言いかねるが、やはり仙台に、国際文化研究科に来てよかったと感じる。いろいろな国の人が集まるため、多文化の魅力がたっぷり味わえ、日々の暮らしに面白い研究をてんこ盛りにして思う存分楽しめる。親切な先生方と、助け合いの精神を持つ学生たちがいるおかげで、ほぼ毎日有頂気分です充実した日々を送っている。

しかし、正直に言うと、最初の2年間は、私は「研究」ということの意味さえはっきり理解していなかった。修論を書き始める前には、すでに構想もあったし、文献もいっぱい読んだから、簡単に書けると思い込んでいたが、実際に筆を動かしてみると、自分の考えの甘さを思い知った。知識不足

のせいで、本を一生懸命読みながら論文を書くのに非常に苦労していた。幸い、先生と院生たちからたくさんの助言と優しい支えをいただいたことにより、やっと完成させ、締切ぎりぎりになってようやく提出できた。その瞬間は、まるで生まれ変わったような気分だった。

勿論、辛い思い出ばかりではない。帰宅途中に、

広瀬川の水の声が夜更けにこんなにはっきり聞こえるのを初めて知ったという感動のほか、論文作成を通し、本当に自分の中で成長を感じた。知識をいっぱい詰め込んだだけではなく、「研究」に対する理解が深まり、自分の進む道もはっきり見えてきた。これからも、夢を胸に刻みながら、心を静めて研究に励んでいきたい。



アメリカ研究講座
平成27年3月
博士課程後期3年の課程修了

目黒志帆美

研究への挑戦

大学卒業後、福島市に本社のある民放テレビ局で報道記者として活動していた私は、血眼になってスクープを追いつめる生活のなかで、1つのことにじっくり取り組みたいという思いを募らせていった。たしかに、記者の仕事は魅力的で刺激に満ちていた。社会で見過ごされがちな問題や事象に着目し、取材して得た根拠をもとに原稿にし、ニュースとして発信するという仕事はやりがいに満ちている。しかし、記者には毎日次々と起こる事件や事故に対応することが求められるため、1つのことに時間をかけて取り組むことが難しい。そう思い悩んでいた矢先に出会ったのがハワイの伝統舞踊、フラだった。仕事の息抜きにフラのレッスンに参加するなかで、フラがどのような歴史を辿ったのかに興味を抱くようになり、このことが研究を始める直接的契機となった。

さらに、経営学の研究者である父に何気なく本学の大学院受験を勧められたときに、自分がやり

たいことができるのはここかもしれない、と直感した。きっと言葉にはしなくても、研究に挑戦してみたいという私の気持ちが、不思議と父には伝わっていたのだと思う。こうして私は7年間勤めた会社を退職し、本学の博士前期2年の課程に入学した。

大学院生活は、すごく楽しくてすごく辛い日々だったといえる。現地に何度も足を運びながら自分の「なぜ？」を解明すべく頭と体と心を働かせることは、終わりのない探検をしているようでわくわくするからだ。しかし、学問的下地がゼロの状態は無謀にもアカデミックな世界に飛び込んだ私には、多くの困難がつきまとった。学部時代に卒論を書いた経験がない、英語力があやしい、論文執筆のいろはを知らない、そもそも文才がない、という劣等生が研究を形にするのにはかなりの努力を要する。こんな私が修士論文、さらには博士論文を完成させることができたのは、見捨てずにご指導くださった指導教員をはじめ本研究科の先生方や、周りの院生のみなさんのおかげである。最後に、総長賞という名誉ある賞を頂けたことに心から感謝申し上げたい。



言語コミュニケーション論講座
平成27年3月
博士課程後期3年の課程修了

斎藤 珠代

5年半の彩り

博士論文を完成させることは長い道のりであったはずですが、振り返るとあっという間のような気がします。私は英語で1つの出来事を表すのに2種類の文体が用いられることについて、その2つにどんな意味の違いがあるかということに、修士課程を含めると5年半取り組んできました。狭いトピックなのに、考えれば考えるほど関連領域の文献を読むようになり、広がりを持つていくことは不思議でした。ちょうど、狭い山道を無心に山頂に向かって登っていて、ふと見晴らしのいいと

ころで振り返ってみると、すそ野にさまざまな景色が広がっているのに気づくような、そのような感覚かもしれません。自分の問題意識を静かに深めていくのを見守って、適宜貴重な助言を下された指導教官の小野尚之先生をはじめとする諸先生方に心から感謝しています。

私が後輩の皆さんに伝えられることがあるとしたら、研究をするにあたって、楽しみながら自分の問題と格闘してほしい、ということです。研究することほど至福に満ちた贅沢があるでしょうか。衣食足りて、心も満たされているからこそ、私は研究したいと思えて、それを実践することが出来ました。自由に自分の問題を見つけ、深め、そして自分自身も変化していくその過程を十分に楽し

んでほしいと思います。神話学者のジョゼフ・キャンベルは「真剣に至福を求めれば、必ず何かが起こる」と述べています。論文を完成できるか、将来の不安、そういったものだけに囚われることなく、どうぞ至福を存分に感じてください。

サマセット・モームがそのエッセイ“Summing Up”の中で、一人一人の人生は日々少しずつ織ら

れてゆくベルシャ絨毯のようだと言っていました。私の未完成の絨毯はどのような柄だろうか、と考えたとき、国際文化研究科で過ごした5年半の部分は特別に輝く糸で織られているような気がしてなりません。苦労とともに大きな喜びを与えてくれた国際文化研究科に感謝するとともに、益々の繁栄をお祈りします。



言語文化交流論講座
平成27年3月
博士課程後期3年の課程修了

バリー・カヴァナ

博士論文を終えて

私は青森県の大学で講師として働きながら平成21年から6年間、国際文化研究科言語文化交流講座に在学し、平成27年3月に博士の学位を修得しました。毎週木曜日、高速道路バスで青森から仙台まで通い、講義を受けてその日の内に青森に帰りました。体力的には大変でしたがとても有意義な日々でした。

入試の合格通知を頂いた時はとても嬉しくてたまりませんでした。

しかし、それまでに日本語で発表をしたり、論文を書いたりといった経験が無かった為、論文作成の仕方や、専門用語に苦戦を強いられ不安だらけのスタートとなりました。

初めて研究内容について発表をした時は緊張のあまり、順調に行きませんでしたが、皆さんの応援のお蔭で前向きに乗り切ることができました。

私の研究テーマはアメリカ人と日本人のオンラインコミュニケーションの対照分析についてでし

た。このテーマで学会にて発表をし、論文を書き、当時の勤務先である大学にて学長賞受賞研究部門を授与されました。

在学中に息子と娘が生まれ、研究はスムーズに進みませんでした。いつもご尽力下さった指導教員、そして得難いアドバイスを下さった教授陣の皆様、言語文化交流講座の同級生と愛する家族のおかげでこの困難に打ち勝つ事が出来ました。

当時住んでいた青森は好きでしたが、在学中は、いつか仙台に住む事が出来たらと思っていました。そんな今年の3月、2つのハプニングで私の人生が劇的に変わりました。1つ目は無事に博士号を修得した事。すごく嬉しかったです。そして、仙台に引越しました！東北大学の高度教養教育・学生支援機構で教員として国際文化研究科の教職員の皆様と共に働けること、心から光栄に思っています。

東北大学に在学した6年間で学んだ事総ては確実に私の中で息づいています。今後は東北大学教員として、そして研究者として新たなステップに進みたいと思います。最後になりましたが、私の研究をサポートしてくださってすべての方々に感謝致します。本当にありがとうございました。

修了者アンケートの結果報告 — 過去10年間の修了後の進路先一覧 —

学生・進路指導委員会 寺本 成彦

研究科の修了者は、国際交流がますます進展する時代に必要とされる人材として、教育・研究機関、官公庁、民間企業、国際機関など、国内外の広い分野での活躍が期待されています。その実態を知るため、修了者がいかなる職場で活躍しているのか、過去10年をさかのぼってアンケート調査しました。以下、その結果を報告します。(2015年6月1日現在)

1. 政府機関・関係機関等

日本学生支援機構

2. 地方自治体

地方公務員(宮城県) ※市町村含む

3. 大学・高等専門学校（研究・教育職）

東北大学、鳥取大学、松山大学、山形大学、岩手県立大学、島根県立大学、静岡県立大学、東京工業大学、東北学院大学、東北文化学園大学、国際医療福祉大学、四国高松学園・高松大学、ノートルダム清心女子大学、名城大学、仙台白百合女子大学、桜の聖母短期大学、宮城学院女子大学、尚絅学院短期大学、福島工業高等専門学校

4. 学校教育教員（高等学校・中学校）

公立高等学校（宮城県）、公立中学校（宮城県）、宮城県塩釜女子高等学校（宮城県）、仙台育英学園高等学校（宮城県）、宮城学院中学校高等学校（宮城県）、聖ドミニコ学院中学校・高等学校（宮城県）

5. 学校教員（その他）

英智学館、ECC Junior、リリース・トランサポート、セイハ英語学院、郡山ザベリオ学園

6. NPO / NGO / 特殊法人

日本赤十字社

7. 民間企業

(株)アミノ、(株)MDI、(株)グリーンズホテルシステムズ、(株)サークルKサンクス（宮城）、(株)JFE商事エレクトロニクス、(株)青

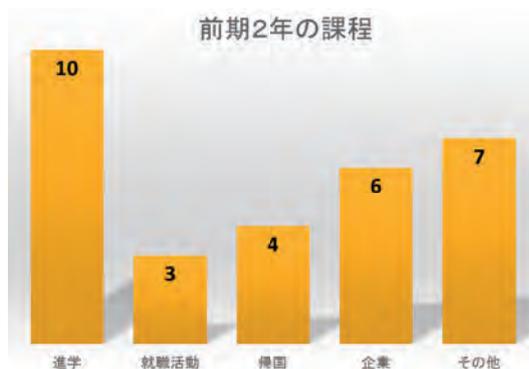
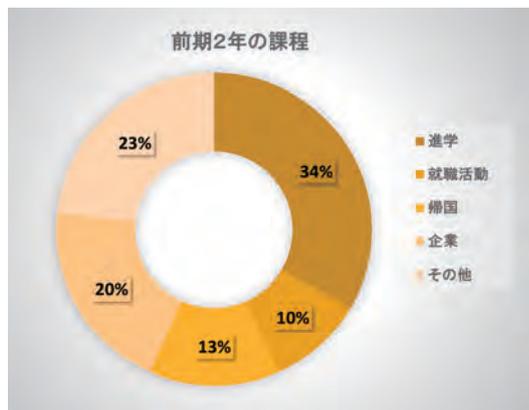
南商事、(株)ダイキエンジニアリング、(株)大有、(株)第一貨物、(株)大明貿易、(株)ティーガイア、(株)テクノスマイル、(株)大日本印刷、(株)東京設計事務所、(株)東海東京証券、(株)東洋ワーク、(株)東京産業、(株)日本通運、(株)日本国土開発、(相)日本生命、(株)日本精機、(株)ノジマ、(株)JR東日本、(株)富士通エフ・アイ・ピー、(株)富士通、(株)プルデンシャル生命保険、(株)プライムアースEVエナジー、(株)ベリサーブ、(株)マツダ、(株)前田製管、(株)三井精機工業、(株)三井物産アグロビジネ、(株)三菱東京UFJ銀行、(相) 明治安田生命保険、(株)メディアゲイン、(株)山武、(株)山形銀行、(株)ユニクロ、(株)ヨドバシカメラ、(株)ヨシムラ、(株)東伸精工、(株)テレウェィヴ、(株)明治安田システムテクノロジー、(有)サンエー商会、(株)日本インサイトテクノロジー、(株)大和証券、(株)東北電力、(株)帝国インキ製造、(株)日本サード・パーティ、(株)ピーシーワークス

8. 海外

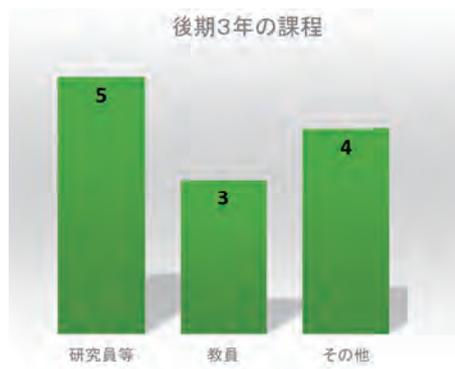
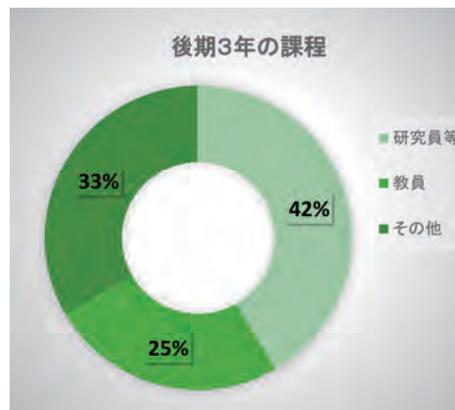
アナドル大学（トルコ）、如水館（バンコク）、新羅大学（韓国）、京畿道庁（韓国）、康寧大学（台湾）、輔仁大学（台湾）、浙江大學（中国）、東北師範大学（中国）、東ヤンゴン大学（ミャンマー）、(株)栗田水处理有限公司（中国）、(株)パナソニックAVCネットワークス（台湾）、IKOMA Language School（シンガポール）、建設銀行（中国）

平成26年度修了者進路内訳

A. 前期2年の課程修了者（修了生30名）



B. 後期3年の課程修了者（修了生12名）



◆ 新任教員紹介



国際日本研究講座 准教授
オリオン・クラウタウ

去る4月1日に、国際文化研究科国際日本研究講座の准教授として着任いたしました Orion Klautau (オリオン・クラウタウ) と申します。この場をお借りして、ご挨拶させていただきます。着任すべく来仙したのは今年の3月ですが、大学院生時代もこちらで過ごしましたので、今回は第二(あるいは第三?)の故郷に帰ったような気持ちです。

出身地はブラジルの北部であり、高校を卒業する前にブラジル南東部にあるサンパウロに移りました。学部は、サンパウロ大学の哲学文学人間科学部で歴史学の方法を身に付け、史料学関係の研究に携わりました。歴史学科在籍の時期に、大学院へと進学して日本研究に取り組むことを決心し、紆余曲折の末、幸いなことに、2005年4月に東北大学大学院文学研究科の博士課程(前期)に入学し、2010年3月に博士号を取得いたしました。その後、東北大学にさらに2年間、日本学術振興会特別研究員として在籍し、2012年4月は、龍谷大学に着任すべく京都

へと赴きました。その後は、ドイツのハイデルベルク大学で研究しつつあちらの日本学研究所で近世・近代関連の科目を担当しました。

以上は当方の経歴ですが、研究内容についても少し紹介したいと思います。専門分野は宗教を中心とする近代日本思想史で、今までは「仏教」なるものについて様々な成果を発表してまいりました。より詳しくいえば、「仏教」という「昔から」存在するように思われるカテゴリーの近代的な構築を描くことにより、その形成の背景に存在したナショナリズムやコロニアリズムの問題をめぐって考察いたしました。こうして、近代思想史が専門とはいえ、宗教史・政治史・史学史のクロスロードに存在する課題に取り組んでまいりました。既成の学問分野に捕われ過ぎないこのような立場より、これから多くの大学院生を「日本学」の枠組で指導していきたいと考えております。



国際政治経済論講座 准教授
勝間田 弘

国際政治学を専門にしています。国際政治の動きを捉えるにあたって、とくに規範やアイデンティティといった要因に関心を向けています。これは、一般的な分析視点とは異なる立場です。国際政治学は通常、軍事的なパワーや経済的な利害といった、現実の世界で目に見える要因に注目します。他方、私は、規範やアイデンティティといった、人々の意識の中にしか存在しない要因に関心を向けているのです。なお、このような立場は、国際政治学の世界では「構成主義」(constructivism)と呼ばれています(規範やアイデンティティが世界を「構成する」という意味)。

「構成主義」の視点から、とくに東アジアにおける地域協力の胎動に注目しています。東アジアとは、日本や中国、ASEAN(東南アジア諸国連合)などを包括する地域です。20世紀、ヨーロッパとは対照的に、この地域では国家間の協力が進んでいませんでした。しかし、21世紀の今日では「東アジア首脳会議」「ASEAN地域

フォーラム」といった枠組みが発展してきています。このような変化の原動力になっているのが、規範やアイデンティティといった要因に外なりません。「地域全体での協力」を求める規範や、「東アジアの一員」としてのアイデンティティが、東アジア諸国を新しい方向に導いているのです。

東アジアの地域協力についての研究は、大学院に在学中から続けています。2000年代の前半、バーンガム大学(英国)において、地域協力におけるASEANの役割に焦点を絞った博士論文を仕上げました。その後、本学に着任するまでに、南洋工科大学(シンガポール)、ブリストル大学(英国)、早稲田大学、金沢大学で研究・教育を続けてきました。この期間も一貫して、規範やアイデンティティといった観点から、東アジアの動きに注目してきました。本学では、これまでの経験を土台にして、さらに研究を発展させていく予定です。

研究紹介

ページからスクリーンへ、スクリーンからページへ

ヨーロッパ・アメリカ研究講座 教授 寺本 成彦

映画作品を、主として文学作品との関連のもとに研究しています。同じ内容を物語っているにもかかわらず、文字による言語表現と映像（および音声）による表現とが根本的に異質であることは自明のことです。しかしその「自明さ」を出発点として、映画と文学という異質な表象形態がそれにもかかわらず、いかに相互に有機的な影響を与えあって来たのか、与え続けているのかを究明することを研究の中心に置いています。

1895年の発明以来、映画は「第七の芸術」として急速に発展しましたが、そのためには最初期から映画表現と物語とが分かちがたく結びつく必要がありました。物語を語るための媒体としての映画の技法が構築されたことは、実は映画ジャンルそれ自体には内的必然性がさほどないと考えられるのですが、ともあれ最初は演劇作品を動く映像に写し取ることで、次いで小説作品を映画へと翻案することで、映画と文学とは不即不離の協働関係を築くこととなります。そこには小説の語りの技法に即して、映画の語りを可能にする撮影技法を組織化していこうとする方向があるのはもちろんですが、それとは逆に、既存の映画作品の語りの技法をもとに小説を創作するという方向性も20世紀には現れてきます。

私はフランス文学研究者でもありますが、専門とするロートレアモン『マルドロールの歌』（1869）という散文詩が、日本の劇作家・詩人・映像作家である寺山修司によって映画『マルドロールの歌』（1977）として映像化されたことに着目し、文学（詩）と映画との関係をそのあわいで（さらに、ロートレア

モンと寺山とのあわいで）探求したことが現在の研究の出発点となっています。ロートレアモン作品を断片化し、脱文脈化して映画スクリーン上に引用する手法には、寺山修司の詩的な問題意識が先鋭的に現われていることを論証しました。それに加えて寺山の短歌「見るために^{りょうめ}両臉をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をうつし」（『田園に死す』）がロートレアモンの一節の書き直しである可能性を、映画の一場面の分析によって示唆しました。

研究の出発点は「詩と映画」であったのですが、現在は物語性の顕著な小説（物語）と映画に焦点を当てて研究を進めています。講義で扱った題材はF・ノリス『死の谷』とその映画への翻案である『グリード』（E・フォン・シュトロハイム）、フロベール『ボヴァリー夫人』と同名の3つの翻案映画（J・ルノワール、V・ミネリ、C・シャブロール）などです。最近の論考では、モーパッサン「野あそび」とその映画化である『ピクニック』（J・ルノワール）とを詳細に比較検討し、1936年に撮影されながら第二次大戦後の1946年にならなければ編集・公開されなかった映画の生成過程を跡づけ、作品を取り巻く時代的・社会的問題を突き止めました。また映画中でブランコに乗るヒロインをトラヴェリングによって撮影したショットが、彼女の内的な感覚に焦点化した表現であり、そこに小説を出発点とした映画表現の可能性が見られる点を指摘しました。現在、このJ・ルノワールの映画作品の研究をさらに進めるとともに、将来的には「詩と映画」という問題圏にも立ち返りたいと考えています。



J・ルノワール
『ピクニック』
(1936 / 1946)

自己中（ジコチュー）から協調へ

国際環境資源政策論講座 准教授 青木 俊明

大学院進学の際、私は、都市・地域計画に関わる研究テーマを希望した。一般に、工学系大学院では、研究テーマは入学後に指導教員との協議で決まることが多かった。私が所属した研究室が得意とする研究テーマは「物流（logistics）」であり、ミクロ/マクロ経済学の分析手法を用いて最適な物流システムや制度を研究していた。そのため、私が希望する研究分野と研究室が得意とする研究テーマはやや離れていたが、幸いなことに、指導教員の先生には「好きなテーマで研究していいよ」と言っていた。

研究室での生活は大変刺激的で、まちづくりに関する情報が、アカデミックな情報から実務的な情報まで、毎日のように得られた。そして、勉強を重ねるほどに、「机上の理論と現実の乖離」に関心が注がれるようになった。その結果、極端な言い方をすれば、「理想の都市計画を描くことはさほど難しくはないが、その実現は極めて難しい」という認識に到った。実現が困難な理由を探っていくうちに、当時の研究者も実務者も、住民心理に対する理解が非常に乏しいことに気付いた。かくしてその空白を埋めるべく、まちづくりに関わる住民心理を研究するようになった。

さて、まちづくりが期待通りに進まない最大の理由は「合意形成の難しさ」にある。なぜ、合意形成が難しいかといえば、そこには「社会的ジレンマ」が存在するからである。

社会的ジレンマとは、「短期的には私的利益を高めるが、長期的には社会的利益を低下させる行動」と「短期的には私的利益が低下するが、長期的には社会的利益が高まる行動」から、一

方を選択する状況を指す。一般に、人は目先の利益を重視するため、前者を選ぶことが多い。つまり、社会や組織への貢献より、自分の利益を重視した行動を行うことが多い。まちづくりに関わる合意形成では、住民個人の利益と社会の利益をバランスさせることが求められるが、多くの人が自己利益の最大化を強く求めるため、社会的な合意形成が難しくなっている。そのため、人々の自己中（ジコチュー）が全体としての最適化を妨げる問題が頻繁に生じている。

利己的な振る舞いを抑制し、社会や組織への貢献を高める方策としては、公正な意思決定過程の実施、事態の帰結に対する認知の向上、協力で得られる利得の向上、道徳意識の向上、社会に対する個人のコミットメントの増強、権限委譲、などが報告されている。私自身は、こういった要因を統合する理論フレームや各要因が機能する有効条件などについて研究している。また、実証的研究としては、災害等による危機によって、組織や社会への協力的行動が促進される現象（災害ユートピア現象（写真1））や、都市の郊外化（写真2）を抑制し、環境負荷の小さな都市構造へとつながるライフスタイルの転換方策も検討している。

こうした生活環境と人間の行動の関係を扱う分野は歴史が浅いため、まだ研究者が少ない。今後、若い研究者の増加を期待している。



写真1 震災時に相互協調し、行列をなす人々



写真2 郊外化の重要要因であるショッピングモール（レイクタウン越谷）



最近の著作から



『『周縁』のドイツ語文学—ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち—』

東北大学出版会、2014年2月、x+476頁

● 藤田 恭子 教授

ドイツ語は歴史的に東欧諸地域と深いつながりがあり、副題に掲げた「ブコヴィナ」もその典型例です。現在のルーマニアとウクライナの国境にまたがるこの地域は、第一次世界大戦後にルーマニア領となるまでオーストリア領でした。第二次世界大戦中には同盟を結んだルーマニアとナチス・ドイツによるショアー（ホロコースト）の嵐が吹き荒れ、戦後は分断されて現在に至ります。

同地からは、皮肉にもルーマニア領となった後に、優れたドイツ語詩人が輩出しました。大多数はユダヤ系で、最も若い世代に属するパウル・ツェランは20世紀最高のドイツ語詩人と評されています。しかし彼以外の詩人たちは長年、認知されないままでした。ルーマニアのマイノリティであったためにドイツ語文化圏から孤立し、ユダヤ系ゆえに、ルーマニアにナチズムが及ぶと迫害されます。生きて終戦を迎えた後も世界各地への離散を余儀なくされ、今度は離散先の政治情勢等に翻弄されます。ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学は「国民国家」や「国民文化」の狭間でマイノリティ、ショアー、ディアスポラの運命を背負ってきたのです。

本書はこの文学を包括的に論じた日本で初めての本格的な研究書です。さまざまな意味で「周縁」に留まることを強いられたつづくことに生きる力を見出した詩人たちの「ことば」を掬い上げ、考察しています。同時に、彼らを等閑視し続けてきた「ドイツ文学史」の在り方をも問い直しています。文学や歴史に関心のある方に読んでいただきたいと思います。



(1) 『APA 論文作成マニュアル』

医学書院、アメリカ心理学会発行、前田樹海・江藤裕之・田中健彦訳、2011年3月、xxii+304頁

● 江藤 裕之 教授

(1) 本書はアメリカ心理学会 (American Psychological Association) が発行する Publication Manual (第7版) の邦訳であり、日本語版としては第2版となる。英語論文執筆のマニュアルには MLA や Chicago もあるが、この「APAスタイル」は行動科学、社会科学、自然科学などの幅広い分野で使用されており、英語圏（特に北米）ではかなりメジャーな論文執筆の指南書である。

英語で論文を書くためのものではあるが、論文の構成 (IMRAD形式) や引用文献の表記法 (著者年号形式：ハーバード方式) の詳しい説明など、日本語で論文を書く際にも役に立つ。さらに、論文を書くための形式的な技術だけでなく、「研究とは何か」といった問題から、研究のための倫理的な配慮や法的基準、また投稿から出版までの具体的なプロセスまで詳しく解説されている点も参考になる。

昨今のインターネットの発達により論文の作成と公表の方法にも大きな変化が起こっているが、最新版では、そういった新しい研究環境にも対応できるように徹底した改訂が施されている。



(2) 『質的研究をめぐる10のキークエスション—サンデロウスキー論文に学ぶ—』

医学書院、マーガレット・サンデロウスキー著、谷津裕子・江藤裕之訳、2013年11月、xi+205頁

(2) この20年ほど質的研究 (定性的研究) に対する関心が高まってきており、心理学、社会学、文化人類学、教育学、看護学などの分野で質的研究法の本質的な問題群に接近することは難しいようである。

本書は、質的研究者が避けて通れない10の問題をキークエスションとして読者に投げかけ、その問題を今日の質的研究の旗手の1人であるマーガレット・サンデロウスキー (ノースカロライナ州立大学チャペルヒル校看護学部教授) の論文を読み、その内容をもとに「論文の解説」において問題解決の糸口を提示するという、従来の翻訳本とは少し趣向の異なるユニークな構成になっている。研究に対するパースペクティブを広げ理解を深める意味で、質的研究の初学者から上級者まで、さまざまな分野の研究者や学生の皆さんにお薦めしたい。

平成26年度外交講座 開催報告

平成26年度学生進路指導委員会副委員長 小原 豊志
ヨーロッパ・アメリカ研究講座 教授

平成26年11月5日に本研究科主催の外交講座として、「日本が直面する外交問題について一日米安保体制と東アジアを中心に」と題する講演会を開催しました。

これまで外交講座は本学および本研究科の学生のキャリア支援の一環として、外交官の方から仕事の実際について講演していただくのが主でしたが、今回はあえて今日のテーマとなっている日本の安全保障問題に焦点をあてることとし、外務省北米局日米安全保障条約課首席事務官の神保諭氏からお話しいただきました。



講演においては、日本を取り巻く安全保障環境、日米安保条約の概要、在日米軍主要部隊とその戦力の展開状況、日米防衛協力のための指針とその見直し状況などが豊富な資料のもとにわかりやすく解説されるとともに、中国との間で問題になっている尖閣諸島への日米安保条約の適用問題や沖縄の在日米軍基地の移設問題などのホットな話題についても外務省の見解が示されました。

このようなお話からも、現場の外務官僚の激務ぶりを十分にうかがうことができ、これまでの外交講座の趣旨も十分活かされていたといえます。

会場には例年の参加人数を大幅に上回る学生や一般市民の方が足を運んでくださり、今回の講演テーマに対する関心の高さがうかがえました。講演後には質問も多く出され、大変活気のある講演会になりました。

平成27年度科学研究費補助金採択一覧

氏名	研究種目名	研究課題名	備考
プジュパールディニル	基盤研究(B)海外学術	モンゴル産フライアッシュの有効利用に関する総合的調査	
岡田 毅	基盤研究(B)一般	タブレット端末を用いたブレンディッドeラーニングによる外国語教育プログラムの開発	
大河原知樹	基盤研究(B)一般	債権法を用いた「現代中東法」のモデル化とその比較法的考察	新規
山下 博司	基盤研究(C)一般	中世タミル語の聖徒列伝『ヘリヤ・ブラーナム』の批判的翻訳と文学的・思想史的研究	
坂巻 康司	基盤研究(C)一般	近代日本におけるフランス象徴主義受容に関する総合的研究	
ナロックハイコ	基盤研究(C)一般	文化化と意味図構築の基礎的研究	
杉浦 謙介	基盤研究(C)一般	移動型多機能端末を活用した外国語教育一実践のための総合的研究一	
深澤百合子	基盤研究(C)一般	禁農モデルを検証しアイヌ農耕文化の実態を解明する	
劉 庭秀	基盤研究(C)一般	日中韓における都市鉱山政策の妥当性評価-自動車電装品を事例に-	
井川 眞砂	基盤研究(C)一般	晩年のマーク・トウェインー新版『自伝』(2010)に見る著者の歴史意識一	名誉教授
藤田 恭子	基盤研究(C)一般	ルーマニア・ドイツ語文学にみる二つの「過去の克服」ーナチズムと社会主義独裁ー	
黒田 卓	基盤研究(C)一般	イランにおける「近代性」の意味変容と「国民」の創生	
野村 啓介	基盤研究(C)一般	フランス第二帝制下の地域権力に関する比較地域史研究	
石幡 直樹	基盤研究(C)一般	メアリ・ウルストンクラフトに見られるピクチャレスク	
小野 尚之	基盤研究(C)一般	生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究	
佐藤 雪野	基盤研究(C)一般	ナショナリズム・経済的利害・民族共生一戦間期チェコスロヴァキアの事例に学ぶ一	
勝山 稔	基盤研究(C)一般	民間の視座を導入した中国通俗文芸受容史の構築一明治以後の民間翻訳をキーワードに一	新規
市川真理子	基盤研究(C)一般	初期近代イギリス演劇における舞台のカーテンの使用法に関する研究	新規
鈴木美津子	基盤研究(C)一般	ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象	新規 名誉教授
藤田 緑	基盤研究(C)一般	局地戦争から読み解くアフリカ文学：ボスマンとングギを中心に	新規
高橋 大厚	基盤研究(C)一般	日本語における人称格制約効果に関する研究	新規
渡邊 竜太	基盤研究(C)一般	20世紀前半の中東欧多文化社会における社会的格差と地方財政	新規
小原 豊志	基盤研究(C)一般	19世紀アメリカ合衆国における反知性主義と「人種」	新規
青木 俊明	基盤研究(C)一般	社会的コンフリクトの解決にむけた可逆的意思決定の有効性とそのメカニズム	新規
勝間田 弘	基盤研究(C)一般	国際社会における規範の伝播一ASEANによる西側の規範の「真似採用」	
帆北 智子	研究活動スタート支援	近代ヨーロッパ地域権力の比較史研究：ロレーヌ=エ=パール公権の領邦君主権を事例に	
高橋 慶	若手研究(A)	文理解中の修正機能メカニズムの解明	
柳 朱燕	若手研究(B)	韓国語テンス・アスペクトの第一言語習得過程及び習得データのコーパス構築	
高橋 慶	若手研究(B)	複雑系としての言語理解モデルの構築	新規
佐野 正人	挑戦的萌芽研究	日韓歴史認識問題の起源と展開ー戦後初期と1990年代を中心にー	
ALIMU Tuoheti	特別研究員奨励費	日本における中国イスラーム研究史に関する調査研究	
大谷 亨	特別研究員奨励費	中国における小人像の学際的研究ービン南を中心とする南海文化との関係を手がかりに一	新規
齋藤 優子	特別研究員奨励費	日中韓における都市鉱山プロジェクトの政策評価一小型家電リサイクルの比較分析一	
陳 照	特別研究員奨励費	マクロ的視点を活用した西洋思想の受容に関する解析的研究近代台湾の事例を中心として	

INFORMATION

オープンキャンパス2015 報告

今年も7月29日、30日の両日、オープンキャンパスが開催されました。今年も研究科の発表会を一般に公開し、講座紹介や入試案内と共に研究科の教育研究活動を大いにアピールしました。今回は研究科の講座再編後はじめての発表会となったため、特に初日の題目発表会は系を中心に盛り上がったようです。昨年と違って、来場者が南キャンパスに集中したため、北キャンパスは比較的静かな感じがしましたが、それでも2日間で500名以上の方が訪れました。ご協力いただいた教員、職員、学生の皆さん、ありがとうございました。



それでも2日間で500名以上の方が訪れました。ご協力いただいた教員、職員、学生の皆さん、ありがとうございました。
(小野尚之)

伊達聖伸氏 (上智大学准教授) 講演会報告

2014年10月3日、伊達聖伸氏(上智大学准教授、宗教学・社会学)を講師とする研究科主催講演会「フランスのライシテと植民地主義の記憶—イスラームの組織化の論理—」が開催されました(於:マルチメディア研究棟)。フランスにおける「ライシテ(脱宗教性)」の研究を専門とされる伊達先生はこの分野の第一人者と目されている方ですが、今回の講演では、この概念がフランス内部でのイスラーム教徒との対応にいかん反映されて来たのかについて丁寧に解説してくださいました。他方、



コメントーターとしてお招きした小田中直樹氏(東北大学教授、フランス経済史)は、フランス社会に関する該博な知識を披露されつつ、現代フランスの抱える様々な問題を浮き彫りにされました。この時点では、翌年1月にパリの諷刺新聞『シャルリー・エブド』社が過激イスラーム教徒によって襲撃される事件が起きるとは想像できませんでしたが、結果的には時勢を先取りした形の講演会となったことが印象的でした。
(坂巻康司)

講演会報告(1) 国際シンポジウム・共同教育ワークショップ

平成27年1月27日(火)と28日(水)の両日、東アジア・環太平洋地域を中心とする世界10カ国の大学から40数名の研究者および学生を



招待し、国際シンポジウム及び国際共同教育ワークショップ「グローバル化する世界における日本語・日本学研究」が開催されました。シンポジウムでは日本研究を専門とする研究者がそれぞれの研究を紹介し、共同教育ワークショップでは北京大学、中央大学校(韓国)、チュラロンコン大学(タイ)、タマサート大学(タイ)、東北大学の博士課程、修士課程の学生が研究発表を行いました。いずれにおいても参加者から活発な質疑応答がなされ、国や大学、教員や学生の枠を超えて、共通の学問的関心についての議論を深めることができました。今回、あらためて日本語・日本学研究の世界的な広がり、研究者間の国際連携をさらに強化することの重要性を認識し、日本学の研究教育の成果を世界に発信する拠点として本研究科の役割を確認した次第です。
(江藤裕之)



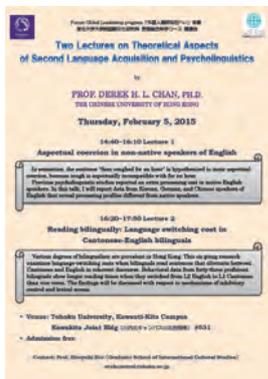
講演会報告(2) 海外における日本研究

平成25年度より本研究科では国際交流委員会のプロジェクトとして、シリーズ講演会「海外における日本研究」を実施しております。第1回(平成26年1月24日)はヴィクトリア大学ウェリントン(ニュージーランド)のEdwina Palmer先生と伊藤雄志先生より「古代日本語に見える隠語」「明治大正時代の国民教育と武士道徳—危機における自己犠牲と禁欲」を、第2回(平成26年6月28日)はオックスフォード大学名誉教授のJames McMullen先生より「江戸時代の儒学:熊本の藩校時習館における釋奠の問題」と題する江戸期の釋奠(せきてん)[孔子を始めとする儒教における先哲を祀る儀式]についてのご講演をいただきました。第3回目となる今年度は、ケンブリッジ大学よりPeter Kornicki先生をお招きし、平成27年6月19日に「江戸時代の外国語能力」というテーマで江戸時代の人々の漢文以外の外国語の知識と能力(朝鮮語、オランダ語、中国語、そしてベトナム語などの話し言葉)について面白い逸話も混ぜてお話しいたされました。世界的に著名な学者でありながら、気さくでユーモア溢れる先生のお人柄は、まさに英国のジェントルマンそのものでした。
(江藤裕之)



講演会報告(3) 言語総合科学コース講演会

本研究科の英語コースの1つである言語総合科学コースでは、外国人講師による言語学の特別講義を開催しています。昨年度はシンガポール国立大学のTomasina Oh先生による「言語と脳」についての講義、そして今年度(平成27年2月5日)は香港中文大学(The Chinese University of Hong Kong)のDerek H. L. Chan先生によるTwo Lectures on Theoretical Aspects of Second Language Acquisition and Psycholinguistics(第二言語習得、及び心理言語学における理論的諸側面に関する2つの講義)が行われました。



2つの講義(Aspectual coercion in non-native speakers of English、及びReading bilingually: language switching costs in Cantonese-English bilinguals)で、チャン先生は参加学生に厳密な実験的手法と、そこから得られた実証的なデータ分析結果に基づく解釈による、量的研究の模範を示してくださいました。ユーモアを交え聴衆を飽きさせることのないブ



レゼンテーションの技術もさることながら、そのinteresting and instructiveな内容に参加学生は感銘を受けたようでした。

(江藤裕之)

第21回国際文化基礎講座

第21回国際文化基礎講座は、「『知』の国際文化学—近世近代日本の学術と世界—」を共通テーマとして、平成26年11月8日、15日、22日に開催されました。

日本では、江戸期に国を閉ざすも、学術の分野では、欧米や中国の動向も意識しつつ、独自の「知」の蓄積がなされました。こうした「知」の伝統を身に着けた知識人のなかから、維新後の欧米文化受容の立役者たちも生まれます。今回の講

座では、近世近代日本の「知」の営みの諸相を国際文化学の視点から考察しました。

第一回は勝山稔准教授による「謎の漢文を解読せよ—白話文解読に挑んだ日本人たち—」で、中国語の口語を踏まえた文の解読を取り上げました。

第二回は江藤裕之教授による「言語の学と『理解』の方法—『認識されたものを認識』する文献学の東西比較—」で、国学と西欧の文献学との共通点とその背景を解説しました。第三回は坂巻康司准教授による「近代日本におけるフランス象徴主義受容—上田敏(1874-1916)とその時代—」で、明治大正期の日本文壇における象徴主義の意味について論じました。

最終日のラウンドテーブルでは、受講生が各講師と自由闊達な討議を重ねる姿が見受けられました。多彩な受講生を多数迎え、公開講座は無事閉幕しました。(藤田恭子)



第22回 東北大学国際文化学会 総会が開催されました

去る平成27年7月29日(水)、東北大学川内北キャンパス国際文化棟 会議室にて、東北大学国際文化学会の第22回総会が開催されました。今年は、大会が開催されなかったこともあり、総会のみで開催となりました。

総会には教員9名が参加し、今後の学会活動のあり方について活発な討議がなされました。総会では、例年通り、活動報告、会計報告、監査報告、次年度事業予定、次年度予算案などが審議されました。2015年度事業では、①会誌『国際文化研究』第22号の刊行、②ニューズレターの発行、③会員の勧誘活動の実施、④講演会後援、の4つが承認されました。発表会については、事務局より「実施体制が整わないため、開催は困難である。そのため、事業案への記載は見送った。開催するためには、会員が積極的に学会運営と発表会に参加することが必要である」との説明がありましたが、開催を望むが出たことから、開催の有無は次期役員会に一任することとなりました。本学会は大きな変革期を迎えていることから、引き続き、多くの皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。(青木俊明)

入学を希望される皆様へ

次の入学試験(春季入試)は、平成28年2月9日(火)、10日(水)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html>

をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科教務係
 TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
 E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp

編集後記

国際文化研究科広報『GLOBE』第28号をお届けします。今号は平成27年度に再編された新しい講座のうち、三つの講座を紹介しています。記事にはそれぞれの講座の特徴がよく表れているように思います。また、数多く開催された講演会報告を掲載しているため、インフォメーションの量が例年の倍になっている点も特徴的です。今号においても例年同様、お忙しい中にも拘らず、修士生の皆さんなどから興味深い原稿を多数お寄せいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。今後も『GLOBE』をよろしくお願いたします。(編集担当)